ペーター・フーヘルの詩集のなかの少数民族形象

――ヴェンデン人・ジプシー・ユダヤ人の形象について――

杉浦　謙介

1. 序

ペーター・フーヘル（Peter Huchel）は，1903 年にベルリンに生まれた。4 歳の年にポツダム近郊の村アルト・ランガーヴィッシュ（Alt-Langerwisch）にある母方の祖父母の農場にあずけられた。フーヘルは，この村で自然を知り，また，農業労働者や少数民族の生活を知った。第 2 次世界大戦後，東ドイツ（ドイツ民主共和国）建国と同時期に刊行された文学雑誌「意味と形式」（*Sinn und Form*）の編集長をつとめた（1948 年 – 1962 年）。しかし，1962 年に編集長を解任され，翌 1963 年からは東ドイツの国家公安局（Stasi）の監視の下, 軟禁状態 [1] におかれる。1971 年に故郷を捨てて西側へ亡命し，1981 年，シュタウフェンで亡くなった。

フーヘルには四つの時期がある。第 1 は，詩人としての立場を確立するまでの時期（1903 年 – 1947 年），第 2 は，文学雑誌「意味と形式」編集長時代（1948 年 – 1962 年），第 3 は，東ドイツでの軟禁時代（1963 年 – 1971 年），第 4 は，西ドイツでの亡命生活時代（1971 年 – 1981 年）である。フーヘルは各時期の詩を編集して，第 1 詩集『詩』（*Gedichte* 1948 年），第 2 詩集『街道 街道』（*Chausseen Chausseen* 1963 年），第 3 詩集『余命』（*Gezählte Tage* 1972 年），第 4 詩集『第九時』（*Die neunte Stunde* 1979 年）を公刊した。

第 1 詩集『詩』は 3 部構成になっている。第 1 部はフーヘルの幼少年時代，第 2 部は少年・青年時代，第 3 部は 1933 年から第 2 次世界大戦後までを題材にしている。つまり，詩集『詩』は 20 世紀前半のパノラマになっている。そして，このパノラマのなかで，民族 / 民衆の自立の歴史が展開するように詩集が構成されている。

第 2 詩集『街道 街道』では, まず冒頭詩「徴」（*Das Zeichen*）によって,「徴」・「ことば」のテーマ [2] が設定される。詩集の第 I 部～第 III 部は平和な時代，第 IV 部は第 2 次世界大戦末期，第 V 部は冷戦時代を描いている。このような時代の推移のなかで,「徴」・「ことば」のテーマは，冷戦時代の「徴」・「ことば」のテーマへと展開していく。

第 3 詩集『余命』では，第 I 部第 2 詩「応答」（*Antwort*）と第 IV 部第 2 詩「応答不能」（*Keine Antwort*）が対になって，詩集全体に「徴」・「ことば」のテーマの枠組をつくる。一方，詩集『余命』は，東ドイツでの軟禁と亡命をテーマにした詩を中心に構成されている。そして，詩集全体は，「徴」・「ことば」のテーマと独裁的国家における軟禁と亡命のテーマとをからませながら展開していく。

第 4 詩集，すなわち最後の詩集『第九時』では，冒頭詩と最後の詩，そして，付加された遺稿（第 VI 部）が詩集全体に「徴」・「ことば」のテーマの枠組をつくる。一方，詩集『第九時』は，東ドイツ出国後の異郷での生活を反映して，異郷での生と死をテーマにした詩を中心に構成されている。そして，詩集全体は，「徴」・「ことば」のテーマと異郷での生と死のテーマとをからませながら展開していく。

フーヘルの詩集は，単に詩を集めたものではなく，各詩が関連して詩集としての構造体，すなわちツィクルス[3)]をつくっている。このような詩集にヴェンデン人，ジプシー（Sinti/Roma; 表記方法は後述），ユダヤ人という少数民族の形象が現れる。本論[4)]では，これらの少数民族の形象についてつぎの点を明らかにする：

- フーヘルの詩集のツィクルス構造においてこれらの少数民族の形象はどのような役割をになっているか。
- フーヘルにとってこれらの少数民族の形象はどのような意味をもっているか。
- 20 世紀におこなわれた少数民族に対する大量虐殺および社会主義的な民族 / 民衆の自立化政策はこれらの少数民族の形象にどのように投影されているか。

本論の進め方つぎのとおりである。ヴェンデン人，ジプシー，ユダヤ人の形象の順で，4 詩集においてこれらの形象が現れるすべての詩を取り上げ，形象ごとに上の 3 点を明らかにし，最後に，これらを集約してフーヘルの少数民族形象についてまとめる。

2.　ヴェンデン人の形象

ヴェンデン人（Wenden）は，6 世紀ごろからエルベ－ザーレ川とオーダー川との間に定住しはじめたスラブ系諸部族の総称である。ドイツ人の東方侵出によって，ヴェンデン人はドイツ人の支配を受けたが，自分の土地・生活・言語・文化を守った。宗教改革・宗教戦争の時代にはヴェンデン語の聖書を出版した。市民革命の時代には，民族再生の活動が起こり，ヴェンデン語の新聞や雑誌が刊行された。ドイツ帝国時代には，ヴェンデン人の言語や文化は抑圧された。ナチス時代には，弾圧をうけた。

第2次世界大戦後，ヴェンデン人の居住地域はソ連の統治下に入る。ソ連はヴェンデン人をドイツ人の支配から解放し自立させた。公式名称もスラブ語系語源の一部族名 Serbja のドイツ語表記である Sorben（ゾルベン人）に変更した。一方，ソ連は，大農場を解体してその土地を農業労働者へ分配することによって（「農地改革」），農業労働者を大地主から解放し自立させた。それまで大地主の下で苦しい生活をしていた農業労働者は，この「農地改革」を歓迎した。1945 年～ 1948 年のソ連占領地区では，民族 / 民衆の自立が謳われていた。とくにゾルベン人（ヴェンデン人）はこの民族 / 民衆の自立化政策の象徴的存在であった。

フーヘルは，1948 年にベルリンの Aufbau 出版社から詩集『詩』を出す。詩集『詩』は，詩集の初め（20 世紀初め）では，農村社会の底辺で苦しんでいた人々（被抑圧の民族 / 民衆）が，詩集の終わり（戦後）には，解放され，荒廃した農村を再建していくという構成になっている。この構成には，詩集編集当時のソ連占領地区の思潮（民族 / 民衆の自立）が反映している[5)]。この詩集の第 2 詩「ヴェンデンの荒野」（*Wendische Heide*）と最後の詩「帰郷」（*Heimkehr*）にヴェンデン人[6)]の形象が現れる。

詩集『詩』の第 2 詩「ヴェンデンの荒野」（GW. I, S. 50 f.）は，1934 年に発表された詩「ヴェンデンの荒野」（*Die wendische Heide*: GW. I, S. 276）がもとになっている。1934 年稿と 1948 年稿との間で大きく異なる点は，1934 年稿の「牧人」（„Hirt“: Str. 2, V. 2）が，1948 年稿では「太古の牧人」（„Uralter Hirt“: Str. 2, V. 1）となり，しかも，この「太古の牧人」が守るものに「民」（„Volk“）ということばが 2 回用いられている点である。1 回目の「民」（Str. 2, V. 1）は，ヒツジの群れとほぼ同義であるが，2 回目の「民」（Str. 5, V. 1）は，ヒツジの群れを超えて，人間の部族をも意味している。「牧人」は「雄ヒツジの鈴の音に囲まれて」はいるが，その「民」は「ちりぢりになって」失われ，「牧人」は「ひとり斜面に立って」いる（Str. 5）。そして，そこには「亡霊のような歌が響」いている（Str. 5, V. 2）。1934 年稿は，ヴェンデンの荒野風景とそこでのヒツジの群れを中心にした幻影を描いているが，1948 年稿は，ここにヴェンデン人の「民」を投影している。そのため，1948 年稿の荒野風景とヒツジの群れの幻影は，ヴェンデン人の苦難の歴史を映すものとなっている。

詩集『詩』最後の詩「帰郷」（GW. I, S. 109 f.）は，故郷に帰郷した場面から始まる。その故郷の村は破壊されていて，耕地も荒れはてている。大鎌はさび，砕土をするにも犂き返すための家畜がない（Str. 3）。こんな光景を前に絶望しているときに，「ひとりの女がヴェンデンの森からやって来」て（Str. 4, V. 5），「やぶに姿を消した / やせこけた家畜を捜し」（Str. 4, V. 6-7），「犂のさびをハンマーで打ち落とし」（Str. 4, V. 10），「石だらけの畑を犂き返し」（Str. 5, V. 5）始めた。絶望していた人間の先頭に立って，明日を切り拓こうとしているのは，「諸民族 / 民衆の母」（„die Mutter der Völker“: Str. 5, V. 3）としてのヴェンデンの女である。詩

「帰郷」は民族 / 民衆（Volk）の明るい未来を示して，詩集『詩』を閉じている。

東ドイツ建国（1949 年 10 月）とともに，民族 / 民衆の自立化政策は，その本来の目的である社会主義化政策へと進む。同様に，「農地改革」も社会主義的なものに変化していく。すなわち，農地所有権は名目上農民名義のままにしておくが，「農業生産協同組合」が農地を集約して，国の計画経済政策の下で運営していく（クレム , S. 183 ff.）。農民にとってみると，やっと手に入れた農地が没収されるのに等しかった。多くの農民が土地を捨てて, 西ドイツへと移住していった。

フーヘルは 1951 年に詩「ヴェンデン湿地村年代記」（*Chronik des Dorfes Wendisch-Luch*: GW. I, S. 293-295）を発表する。ここでは，ヴェンデンの老婆が森から帰ってくる（Str. 1-3）。老婆は，雨のなかを疲れてゆっくりと歩き，燃料のまきを引きずっている。そして，そのまきで「自分のスープを料理する」（Str. 3, V. 7）だけであり,「自分のミルク」（Str. 3, V. 8）を確保しているだけである。人々のために働く余力は残っていない。詩「ヴェンデン湿地村年代記」には,「諸民族 / 民衆の母」として民族 / 民衆を先導するヴェンデン女（詩「帰郷」）も，かつての民族 / 民衆の指導者「太古の牧人」（詩「ヴェンデンの荒野」）も登場しない。戦争によって荒廃した農村を再建するのは, ただ人々の労働だけである（Str. 4-7）。10 月になって冬が始まろうとしているのに,「人々は夜になってもまだ犂をうごかしてい」る（Str. 8, V. 4）。ここには社会主義国家のなかの民族 / 民衆の現実が表現されている。

フーヘルは，1971 年 4 月に西側へ亡命する。そのさい，イタリアに一時滞在し，そこで詩「オリーブ樹とヤナギ」（*Ölbaum und Weide*: GW. I, S. 187; 詩集『余命』所収）をつくる（1971 年 9 月）。この詩には, 1951 年から 20 年ぶりに「ヴェンデン」ということばが現れる。この詩のなかの「ヴェンデンのヤナギの母たち」（„die wendischen Weidenmütter“: Str. 3, V. 4）は，ヤナギと老婆とが複合した形象であり,「足を大地のなかに埋め込ませている，/ その大地は私の記憶なのだ」（Str. 3, V. 9-10）。「記憶」は，亡命後のフーヘルにとって，故郷の風景に出会える唯一の場所になった。

以上のように，ヴェンデン人の形象は，民族 / 民衆の自立の歴史を展開する詩集『詩』において中心的な役割をになっている。しかし，その後，民族 / 民衆の自立化政策が社会主義化政策へと進行するのに連動して, ヴェンデン人の形象は, 重要性を失い，社会主義国家東ドイツのなかの貧しい民族 / 民衆の形象のひとつとなり，また，亡命後は，故郷の風景の幻影的形象となった。ヴェンデン人の形象の意味の変遷にソ連占領地域における民族 / 民衆政策の変化およびフーヘルの生活の変化をみることができる。一方，大量虐殺の影響は認められない。

3. ジプシーの形象

「ジプシー」といわれる人々は，昔，インド北部に住んでいたが，14 世紀までにバルカン半島にも移った。彼らは身体の清潔を厳格に守る生活をしていたので atsigani（「触れることができない人々」を意味するギリシア語）と呼ばれた。この語は，ルーマニア語の tigan などを経て，ドイツ語の Zigeuner となった。14 世紀後半，オスマン帝国がバルカン半島にも勢力を拡大するのにともなって，彼らの一部が中欧・西欧に向かって移動した。彼らは，自分たちが「小エジプトの貴族」であり，巡礼の旅をしているのだと語った。ここから「エジプト人」を意味するフランス語の gitan や英語の Gypsy が生まれた。彼ら自身は自分たちのことを Sinti などと称した（Rao-Casimir, S. 444）。一方，オスマン帝国の支配下のバルカン半島に残った人々は自身を Roma と称した。Roma は, オスマン帝国内で農奴として拘束されていたが，オスマン帝国の衰退のなかで農奴から解放され，一部が 19 世紀に中欧・西欧に移動した。約 500 年の時を経て Sinti と Roma は再会するが，彼らの言語や文化は大きく異なっていた（Holl, u. Jonuz, S. 422）。ナチスの時代には，彼らは大量虐殺に遭った。

フーヘルは彼らのことを Zigeuner と呼んだ。フーヘルにとって Zigeuner は, 狭い意味での Sinti もしくは Roma ではなく，上のような背景をもった人々全体を表している。本論では, フーヘルの Zigeuner を「ジプシー」と表す。これとの関連で, Sinti を表すときは「ジプシー（Sinti）」, Roma を表すときは「ジプシー（Roma）」, Sinti と Roma を同時に表すときは「ジプシー（Sinti/Roma）」とする。

詩集『詩』の第 1 詩「由来」（*Herkunft*: GW. I, S. 49 f.）は，フーヘルの幼少年時代の農村にいた「鋳掛け屋（＝ジプシー）」（Str. 3）,「下女」（Str. 4）,「下男」（Str. 5）の姿を描いている。そして，彼らを「友人たち」（Str. 2, V. 7; Str. 6, V. 2）と記している。詩集『詩』がツィクルスとして展開する民族 / 民衆の自立の歴史の初めにジプシー形象が置かれている。

詩集『街道 街道』の冒頭詩「徴」（GW. I, S. 113 f.）は, フーヘルの新しい詩論・自然観を示す重要な詩であり, この詩集のツィクルス構造の起点となる詩である。その第 5 連は,「だれが書いたのか，/ 警告の文字を / それはほとんど解読できない。/ 私はそれが杭にあるのを見つけたのだ，/ 湖のすぐうしろで。/ それは徴だったのか」となっている。ジプシー（Sinti/Roma）は，放浪生活のなかで，さまざまな場所に暗号文字を記して互いに連絡を取り合っていた。このような通信方法が詩「徴」の背後にあるとみることができる。

詩集『街道 街道』第 II 部第 2 詩「バルチク近郊の峡谷」（*Schlucht bei Baltschik*: GW. I, S. 125）はブルガリアのジプシー（Roma）を題材にしている。なんらかの虐殺と隠蔽があったことを「月」が告発する（Str. 1）。それに「老婆」が気づき（Str. 2），叫びながら，燃えるまきを死者たちの世界へと投げ入れる（Str. 3）。し

かし，朝になると平凡な農村風景になっている（Str. 4）。詩は，虐殺や呪術と平凡な世界とのコントラストでできている。これは，詩集『街道 街道』のツィクルスの展開（平和な世界から戦争・冷戦の世界への展開）の伏線となっている。

詩集『街道 街道』第 III 部第 6 詩「カプート干草道」（*Caputher Heuweg*: GW. I, S. 138）にもジプシー形象が現れる。かつて，フーヘルは農村で少年時代をおくりながらも，その健全な労働世界に自分の場所を見い出せずにいた。ジプシー（Sinti/Roma）も，あちこちの農村を回りながら，鋳掛け屋をしたり，農作業の手伝いをしたりしていたが，農村の正規の構成員ではなく，はみ出し者であった。同じはみ出し者として，フーヘルはジプシーの運命を負おうとする。「……少年時代の干草道，そこに私はかつてすわっていた。/ 高い草のなかで運命を，年老いたジプシーを待ちながら，/ そのジプシーといっしょに行くために」（V. 11-13）。ここに，詩人としての出発点があり，詩集がツィクルスとして展開する「徴」・「ことば」のテーマの原点がある。

軟禁生活時代の詩集『余命』第 I 部第 6 詩（表題なし : GW. I, S. 179）は，「奇術師たちは去っていく」（„Die Gaukler sind fort“）に始まり，「高名な奇術師たちは去っていく」（„Die hochberühmten Gaukler sind fort“）に終わる。ここにジプシーが登場する。詩のなかの「奇術師たち」は，直接的にはジプシーの旅芸人をさしているが，間接的にはフーヘル自身を意味している。また，ドイツを意味する「カシ」（Str. 1, V. 8; Str. 3, V. 1）には，悪のシンボルである龍の皮膚をもったコウモリたちが眠っている（Str. 3, V. 4-5）。このような「カシ」をあとにして，ジプシー＝フーヘルは「去っていく」。この詩は，悪のはびこる国（東ドイツ）からの旅立ちを暗示している。そして詩集『余命』がツィクルスとして展開する独裁的国家における軟禁と亡命のテーマと結びついている。

亡命生活時代の詩集『第九時』の第 III 部は，ジプシー形象をもつ下の 3 つの詩で枠がつくられている。

第 III 部第 2 詩「東部の川」（*Östlicher Fluß*: GW. I, S. 242 f.）は，フーヘルの故郷の自然を背景にしている。そこでは，「（ヤナギの）根には / 放浪者たちの / 秘密が隠されている」（Str. 2, V. 2-4）。しかし，その実体は，「乏しい宝物，/ さびた釣り針，/ とっくに忘れられた対話を / 保存するための / 底のない缶」（Str. 2, V. 5-9）にすぎない。「放浪者たち」ジプシーが大切に守ってきたものがあばかれ，その実体が無意味なものであることが白日のもとにさらされている。故郷の自然に秘密を隠したジプシーとフーヘルとが重なる。

第 III 部の最後から 2 番目の詩「途上」（*Unterwegs*: GW. I, S. 245 f.）では，「凍りついた葉たちが / 群れとなってさまよっていた，/ 針金をめぐらせたその日が / その群れを火の穴の上で倒した」（Str. 1, V. 1-4）として，ジプシー（Sinti/Roma）の大量虐殺が暗示される。そして，魔術的な「火打石鎌」（„die Feuersteinsichel“: Str. 3, V. 3）を「地獄の池々の縁で」（Str. 3, V. 5）失い，追われるように放浪するジプ

シーの女が描かれている。

第 III 部の最後の詩「魔術消去」(*Entzauberung*: GW. I, S. 246 f.) [7] では，ジプシーの男が「追放された王」(Str. 1, V. 3) として魔術的な方法で，フーヘルの故郷の村 [8] に出現する。前述のように，ジプシー (Sinti) は，ドイツに現れたころ (1400 年ころ)，追放された「小エジプトの貴族」と自称していた (Rao-Casimir, S. 444)。フーヘルの詩では，湿気によって壁に人物らしき形ができ，それが「追放された王」となって抜け出してくる (Str. 1)。しかし，「追放された王」は，かごとやかんと鍋を背負った雌ラバを引っ張って歩く (Str. 2)。これは，ジプシー (Sinti/Roma) の生業のひとつであった鋳掛け屋のありふれた姿である。また,「分農場」,「さびた脱穀機」,「粗いわら」という村の生活にとってありふれたものに囲まれて寝ている (Str. 3)。一方,「小作人の妻」の語るところによれば，このジプシーの男は魔術に通じていて,「十月末に」大地から火を喚び起こしたという (Str. 4)。しかし，このうわさに対して，最終連は,「本当は / イタウ，ジプシーの男は / 明るい七月に / アザミの司教紅紫色のなかを通って / 永遠に去っていったのだ」(Str. 5, V. 1-5) として,「十月末に」あのジプシーの男がこの村で魔術を使うことはありえないことを示す。このようにして,「追放された王」としてのジプシーの男の魔術性が消去されていく。

詩集『第九時』第 III 部のジプシー形象をもつ上の 3 つの詩は「魔術消去」をモティーフにしている。とくに, 第 III 部最後の詩「魔術消去」には, このモティーフが強く現れている。一方，詩集第 II 部最後の詩『第九時』(*Die neunte Stunde*) はイエスの宗教性剥奪を示し, 同じように「魔術消去」をモティーフにしている。このような詩を詩集の中心部 (第 II・III 部の結びの位置) に対にして置くことによって，詩集全体に「魔術消去」のモティーフを設定している。また，第 III 部の 3 つのジプシー形象の詩は，詩集がツィクルスとして展開する異郷での生と死のテーマと強く結びついている。

ところで，詩「魔術消去」に描かれた「追放された王」, 魔術性を失い去っていくジプシーの男はフーヘル自身でもある。かつては東ドイツを代表する文学雑誌「意味と形式」編集長であり，東ドイツでは国家公安局が監視する要注意人物であったフーヘルも，西ドイツに亡命し，70 歳代の老人になり，死を迎えようとしている。また，詩「魔術消去」のジプシーの男は「徴」(Str. 4, V. 5) とかかわるが，フーヘルも，詩集『街道 街道』以来,「徴」を詩論の中心においてきた。この点でも，ジプシーの男とフーヘルとは重なっている。

以上のように，ジプシー形象は，4 詩集すべてにおいて，各詩集がツィクルスとして展開するテーマに密接に結びついている。また，第 2 詩集以降は，ジプシー形象はフーヘル自身を映す形象となっている [9]。一方, 社会主義的な民族 / 民衆の自立化政策は，詩集『詩』の冒頭のジプシー形象に反映されているが，ヴェンデン人の形象のように，民族 / 民衆の自立の歴史を象徴するような役割はない。ジ

プシー（Sinti/Roma）の大量虐殺は，暗示されるだけにとどまっている。

4.　ユダヤ人の形象

ユダヤ人は，かならずしも少数民族とはいえない。なぜなら，ユダヤ人は経済をはじめ多くの分野で多数民族以上の力をもってきたし，そもそも，「ユダヤ人」とはユダヤ教という宗教と結びついた概念でもあるからである。しかし，ユダヤ人は，各都市，各地域で小さな集団をつくって生活してきた。そのため，各都市，各地域において，ユダヤ人は少数民族とみなされてきた。

文学や芸術においては，ユダヤ人の形象は，実際のユダヤ人ばかりではなく，旧約聖書に描かれたユダヤ人や事件をも含んできた。文学や芸術においては，旧約聖書を抜きにしてユダヤ人を考えることはできない。フーヘルのユダヤ人の形象をすべて考察するためには，旧約聖書の人物や事件も考察の範囲に入れる必要がある。

4. 1.　アブラハム形象・ヨブ形象・バベル形象

詩集『余命』第 III 部の詩「ヨルダン川のほとりで」（*Am Jordan*: GW. I, S. 201）は，アブラハムの死の場面を描いている。しかし，その描き方は，旧約聖書に則したものではない。旧約聖書ではマクペラの洞穴に葬られたアブラハム（「創世記」第 25 章第 9-10 節）が，詩「ヨルダン川のほとりで」では煙となって天にのぼることを願うが（Str. 1），これは，フーヘルの原風景において，人間と天空とが一体になっていたからである（杉浦 , S. 197-201）。また，旧約聖書ではカナン山地に住んでいたアブラハムが，フーヘルの詩ではヨルダン川のほとりに現れるが（Str. 2），これは，フーヘルの原風景が川辺にあったからである（杉浦 , ebd.）。この詩のアブラハム形象にはフーヘルの原風景が投影されている[10)]。

詩集『余命』は, 独裁的国家における「徴」･「ことば」のテーマをツィクルスとしてあつかっている。その第 V 部第 1 詩（表題なし）「林，/……」（„Gehölz,/...“: GW. I, S. 213）は，東ドイツでの軟禁生活時代の「徴」･「ことば」の状況を表している。そこでは,「ことば」（Str. 2, V. 4）は，本拠地の地下から引きずり出されて,「掘り砕かれたヨブの骨」（Str. 3, V. 4）となっている。

詩集『第九時』は，異郷での「徴」･「ことば」のテーマをツィクルスとして表している。その第 II 部第 1 詩「出会い」（*Begegnung*: GW. I, S. 235 f.）では，フーヘルは「天使の言語」（Str. 7, V. 2）で語りながら, 荒廃した「ことば」, すなわち「バベルの破壊されたれんが」（Str. 7, V. 3）のもとへ降りていこうとする。

上の詩におけるヨブ形象とバベル形象は，詩集がツィクルスとして展開する「徴」･「ことば」のテーマに密接に関係している。

4. 2.　エフライム形象

詩集『余命』第 I 部第 4 詩「到着」（*Ankunft*: GW. I, S. 177 f.）は，「イザヤ書」第 28 章第 1 節のことば「わざわいだ，エフライムの酔いどれたちの豪華な冠よ，しおれた花よ」（„Weh der prächtigen Krone der Trunkenen von Ephraim, der welken Blume...“: *Die Luther-Bibel*, S. 7653）を引用することによって（„Weh der verlorenen/ Krone von Ephraim,/der welken Blume“: Str. 2, V. 7-9），詩を古代イスラエルの北王国（別名エフライム）と結びつけ，アッシリア帝国に占領された北王国から敗走する兵士を描いている。しかし，この詩は，現代の形象（「降参」を意味する「白い肩帯」„weißen/...Schärpen“: Str. 1, V. 1-2，「刈り取り機」„Mähmaschine“: Str. 2, V. 10）やフーヘルの世界の形象（「巫女たち」„Sibyllen“: Str. 1, V. 7，「バン」„Teichhuhn“: Str. 2, V. 2）をも用いて，古代イスラエル史の北王国からの敗走に第 2 次世界大戦末期のフーヘルの敗走体験を重ねている。

詩「到着」は，詩集『余命』の第 I 部第 4 詩に位置づけられている。この詩の前後はつぎのように配列されている。第 I 部第 1 詩「オフェーリア」（*Ophelia*）は，ベルリンの壁を越えて西側に脱出しようとして東ドイツの国境警備兵に射殺された少女を題材にしている。第 2 詩「応答」は，自然界からフーヘルに発信される「徴」を記し，東ドイツでフーヘルに迫る危険を「徴」のかたちで形象化している。第 3 詩「ヘルクレスの星座の下で」（*Unterm Sternbild des Hercules*）は，イタリア形象を導入することによって，東ドイツとは対照的な世界を示す。第 5 詩「亡命」は，亡命をめぐる自問自答を記している。第 6 詩「奇術師たちは去っていく」は，ジプシーの旅立ちと東ドイツからのフーヘルの旅立ちとを重ねている。第 4 詩「到着」は，第 5 詩「亡命」（Exil）の直前に位置している。このような配列方法によって，第 4 詩「到着」は，「東ドイツ」から「外国」への「亡命」というイメージをもつようになっている。

詩「到着」は，古代イスラエル史の形象（エフライムの滅亡と敗走）と 20 世紀ドイツの戦争の形象（敗走）とを重ねている。しかし，独裁的国家における軟禁と亡命をテーマにした詩集『余命』のツィクルス構造のなかに組み込まれることによって，東ドイツからの敗走（亡命）というイメージを有している。

4. 3.　バビロン捕囚形象

詩集『余命』第 IV 部第 4 詩（表題なし）「11 月 /……」（„November/...“: GW. I, S. 205）は，「バビロン捕囚」を題材にし，「エゼキエル書」冒頭部分（第 1 － 3 章），すなわち，バビロンのケバル川のほとりで神がエゼキエルに啓示を与える場面を描いている。しかし，詩「11 月 /……」はこの場面の再現ではない。フーヘルの世界が反映されている。アシ刈り（Str. 1, V. 5-6）は，フーヘルの農村原風景

の風物であるし，「ロバ」が「霧」を運んだり，「マツ」が「闇」を播いたりする（Str. 3, V. 1-2; V. 3-4）のは，フーヘルの詩の世界の事象である。さらに，詩「11 月 /……」では，「エゼキエル書」とは逆に，天から何も啓示が下されない。「捕虜たち」は力なく横たわっている（Str. 2）。

詩「11 月 /……」は, 詩集第 IV 部第 4 詩に位置づけられている。この詩の前後はつぎのように配列されている。第 1 詩「隣人たち」（*Die Nachbarn*）は，湖に飛来するアオサギとこれに食われるばかりで逃げ出すことのできない魚やカエルを寓意的に描く。第 2 詩「応答不能」（GW. I, S. 204）は,「徴」と「ことば」をテーマにしているが，文化大革命で徹底的に否定された文人官僚の形象を挿入している（„eines Mandarinen“: Str. 2, V. 5）。第 3 詩「ヴィズナールへの通りで」（*Auf der Strasse nach Viznar*: GW. I, S. 204）は, フランコ一派に「捕縛され者たち」（Str. 2, V. 2; = 詩人ロルカら）が銃殺される場面を描く。そのうえで, 第 4 詩「11 月 /……」につながっていく。第 5 詩「雪」（*Schnee*）は，獲物を待ち伏せするキツネたちという寓意的形象で，東ドイツの秘密警察を暗示的に描いている。このような配列によって，詩「11 月 /……」の「捕虜」は，東ドイツという独裁的国家のなかに捕らえられた「捕虜」というイメージをもつようになっている。

一方, 東ドイツからの敗走（亡命）というイメージをもつ第 I 部第 4 詩「到着」と東ドイツのなかの捕虜というイメージをもつ第 IV 部第 4 詩「11 月 /……」は，第 I 部と第 IV 部の同じ第 4 詩として呼応している。この呼応は，第 I 部第 2 詩「応答」と第 IV 部第 2 詩「応答不能」という 2 詩が,「徴」テーマで呼応しているのと並行関係にある。

詩「11 月 /……」は，「バビロン捕囚」を題材にしているが，フーヘルの詩の世界を重ねている。そして，詩集『余命』のツィクルス構造に組み込まれることによって, 東ドイツという独裁的国家のなかに捕らえられた「捕虜」というイメージをもつようになっている。

4. 4.　アンモン人の形象

詩集『第九時』第 I 部第 2 詩に「アンモン人」（*Der Ammoniter*: GW. I, S. 230）と題する詩がある。「創世記」では，アンモン人はアブラハムの甥ロトの息子ベン・アミを祖先にすると記されている（第 19 章第 38 節）。しかし，アンモン人とイスラエルとは武力衝突を繰り返してきた（「士師記」第 11 章,「サムエル記（上）」第 10 章など)。「列王記（上）」では，ソロモン王はアンモン人の神モレクをはじめ異教の神々を祀り，このことが原因になって，イスラエルは滅亡したと記されている（第 11 章第 5−33 節)。アンモン人とユダヤ人とは神話上の遠い血縁関係にあるにすぎず，むしろ，対立関係にあったが，本論では，フーヘルの詩におけるユダヤ人の形象を網羅的に考察しているので，アンモン人もユダヤ人の形象に

含めて考察を進める。

フーヘルは「エレミア書」第 19 章第 1−11 節に沿って詩「アンモン人」を書いている。しかし,「エレミア書」では，預言者エレミアがエルサレム破壊の比喩として，ひとつだけ壷を砕いているのに対して，フーヘルの詩では,「毎日壺を焼き / その壺を私は夕方, 太陽の前で / 岩にあてて砕いた」（V. 10-12）のように, 毎日，壷（複数）を焼き，毎夕，それらを砕いている。これは，徒労とむなしさを示す比喩表現になっている。また，フーヘルの詩のアンモン人はヒンノムの谷にとどまっている（V. 2-3)。ヒンノムの谷はアンモン人にとっては異郷である。しかも,「神々とその火にうんざりしながら」（V. 1）異郷にとどまりつづけている。そして,「昔からの随行者たち」（V. 4）も彼のもとを去ってしまっている。さらに,「死のにおい」（V. 18）が漂うほど,「死」が間近に迫っているために，外界の美しさや仕事の喜びをもはや感じることができなくなっている（V. 13-17)。このように，フーヘルの詩のアンモン人は，嫌々ながら，異郷で，旧友もなく，間近に迫った死に喜びも消えうせ，むなしい日々をおくっている。このようなアンモン人は旧約聖書には存在しない。

詩「アンモン人」は詩集『第九時』第 I 部第 2 詩に位置づけられている。第 I 部全体はつぎのように配列されている。第 1 詩（表題なし）「ニワトコ……」(„Der Holunder...“）は，ギルガメシュ伝説を素材にして，故郷を捨てたエンキドゥが異郷で死ぬ場面を描いている。第 2 詩は「アンモン人」である。第 3 詩「メルポメネー」（*Melpomene*）は，ペルシャ帝国の王ダレイオスのスキタイ遠征を題材にして，異郷を敗走しながら，異郷での死と向かい合っているペルシャ兵たちを「我々」（Str. 3, V. 4）ととらえて描いている。第 4 詩「オデュセウスの墓」（*Das Grab des Odysseus*）は，イタリア系のオデュセウス伝説を題材にして，故郷を離れた人間の運命，すなわち，異郷をさまよううちに，すべてが無に帰してしまう運命を描いている。第 5 詩「アダの矢じり」（*Pfeilspitze des Ada*）は古代メソポタミアの考古学出土品を表題にし，砂漠の放浪の民の風景と死の幻影とを重ねている。第 6 詩「アリステアス I」（*Aristeas I*）と第 7 詩（第 I 部最終詩）「アリステアス II」（*Aristeas II*）とは，ヘロドトスの『歴史』に記録された不思議な人物アリステアスを題材にして，カラスの姿で異郷をさまようアリステアスを描く。詩集『第九時』第 I 部のすべての詩が，古代の形象を用いて，異郷をさまよいながら死と向かい合っている人間を描いている。詩「アンモン人」は，このような第 I 部の第 2 詩に位置づけられることによって，一方では，この詩がもっている「異郷での生と死」のイメージを増幅させ，他方では第 I 部のテーマである「異郷での生と死」の表現に関与し，さらに，詩集『第九時』がツィクルスとして表現する「異郷での生と死」の表現にかかわっている[11)]。

4. 5.　20 世紀のユダヤ人に関連しうる形象

20 世紀のユダヤ人に関連しうる形象はつぎの 2 詩に現れる。

詩集『詩』第 3 部第 3 詩に「ハンス・A.・ヨアヒムの思い出のために」（*In memoriam Hans A. Joachim*: GW. I, S. 96 f.）がある。この詩は，「I アンティーブ岬」（*I Cap d'Antibes*）と「II 嘆き」（*II Klage*）に分かれ，「I アンティーブ岬」の末尾には「1938 年」（„1938“）と記されている（「II 嘆き」には，年代は記されていない）。また，詩の表題として，フーヘルの若いころの親友であり，1944 年にアウシュヴィッツで殺害されたユダヤ系ドイツ人ハンス･A.･ヨアヒムの名前を冠している。しかし，この詩からナチスによるユダヤ人虐殺のテーマを読み取ることはできない。フーヘルは 1929 年にヨアヒムらといっしょに南フランスのアンティーブ岬に滞在したことがある（Nijssen S. 68）。詩はこの地域の風景を背景にして死者たちの世界の幻想を描いている。この詩は，「I アンティーブ岬」の末尾に記載された「1938 年」によって，詩集『詩』第 3 部の初めの位置（第 3 詩の位置）に第 2 次世界大戦前夜という時代を設定し，また，この時代の暗い空気を表現する役割をになっている。このようなかたちで，詩「ハンス・A.・ヨアヒムの思い出のために」は詩集『詩』のツィクルス構成に関与している。

詩集『余命』第 II 部第 2 詩「遺文書」（*Nachlässe*: GW. I, S. 185）は，ワルシャワ・ゲットー蜂起（1943 年 4 月 19 日 − 5 月中ごろ）[12] のさいに，ユダヤ人たちが地下に埋めて後世に残そうとした文書の缶（Benz et al., S. 796）を題材にしている。しかし，この詩のテーマは，ゲットー蜂起でもワルシャワのユダヤ人でもなく，「ことば」である。すなわち，この詩は，「ことば」はどのような過酷な状況をもくぐり抜けて後世に伝えられるものであることを示そうとしている。詩「遺文書」は，ユダヤ人のゲットー蜂起を題材にしながらも，詩集『余命』のテーマ，すなわち，独裁的国家における「徴」･「ことば」のテーマと関連している。

このように，20 世紀のユダヤ人に関連しうる形象をもつ 2 篇の詩も，20 世紀のユダヤ人あるいはユダヤ人虐殺とは関連せず，詩集のツィクルス構造や詩集のテーマと関連している。

フーヘルのユダヤ人の形象は，旧約聖書の人物・事件の形象として現れることが多く，20 世紀のユダヤ人の形象として現れることはまれである。また，フーヘルのユダヤ人の形象は，旧約聖書の人物・事件そのもの，もしくは，20 世紀のユダヤ人そのものを表すというより，フーヘルの生や思想を強く反映し，詩集のツィクルス構造と密接に結びついて，詩集のテーマを展開しているといえる。大量虐殺の影響は，詩集『余命』の詩「遺文書」の背景にわずかに見ることができるにすぎない。社会主義的な民族 / 民衆の自立化政策の影響はない。

5. 結び

フーヘルの 4 つの詩集はツィクルス構造をもち，そのなかで各詩集のテーマを展開している。ヴェンデン人の形象は第 1 詩集『詩』において中心的な役割をになっているが, 第 2 詩集『街道 街道』以降は役割をもたない。ジプシーの形象は, 4 詩集すべてにおいて，各詩集が展開するテーマに密接に結びついている。また, 第 2 詩集以降は，フーヘル自身を映す形象となっている。ユダヤ人の形象は，旧約聖書の形象として現れることが多いが, とくに第 3 詩集『余命』と第 4 詩集『第九時』において重要な役割をになう。一方，ヴェンデン人の形象には社会主義的な民族 / 民衆の自立化政策の影響が強く現れるが，ジプシーの形象には社会主義的な民族 / 民衆の自立化政策の影響も大量虐殺の影響も弱く現れるだけであり, ユダヤ人の形象には大量虐殺の影響のみがごく弱く現れるだけである。

フーヘルの 3 つの少数民族形象は，4 詩集のツィクルス構造における役割りの点，フーヘルにとっての意味の点，大量虐殺や社会主義的な民族 / 民衆の自立化政策の反映の点で大きく異なっている。しかし，3 つの形象とも，詩集に現れる場合は，その詩集のツィクルス構造に深くかかわっている。

注

1) フーヘルはつぎのように述べている,「ほぼ 8 年間私はポツダム近郊のヴィルヘルムホルストの自宅で完全に隔離されて生活していた。［中略］スパイが向かいに住んでいた。このスパイは，私を訪ねてくれた数少ない友人の車のナンバーを記録していた」(GW. II, S. 373)。身体を拘束されることはなかったので，外出することはできたが，シュタージ（Stasi）が監視していた（Walther, S. 291: Stasi の隠し撮り写真)。郵便は検閲され (GW. II, S. 381), 電話も傍受されていた (Walther, S. 121)。国外への旅行はできなかった。
2) 「徴」とは，自然界から人間へと発信されるという特殊な形態を有した記号であり, ヨーロッパでは中世以来 Signatur としての伝統をもっている。また,「ことば」とは，フーヘルにとって，言語を中心にして，人間，社会，歴史，詩人の使命などのさまざまな問題がからみあった複合体である。そして, フーヘルにおいては,「徴」と「ことば」は一対のテーマとなっている。
3) これらの各詩集について，1986 年に Joachim Müller は，論文 *Verwandelte Welt – Zur Lyrik Peter Huchels* のなかで次のように述べている。「フーヘルの 4 つの詩集は, 単に個々の詩を集めたものではなく，むしろ，熟慮された構成（Komposition）を示している。その構成は，詩集のなかの各部の編成（Binnengruppierungen）においてもみることができる。詩集のなかの各部は，その順序が簡素なローマ数字で示されている。その各部内の関連性は明らかである。各部のなかには，ツィクルス的な配列がある」(Müller, S. 166)。しかし，Müller 以降この点をテーマにした研究はなかった。杉浦謙介の博士論文『フーヘル研究――詩集のツィクルス構造と「徴」・「ことば」・少数民族形象――』（東北大学 2004 年；雄松堂出版 日本博士論文登録機構でコピーを製本して配布）がこの点を網羅的に研究している。

4) フーヘルの少数民族形象の全体像を明らかにした研究は, 杉浦謙介の博士論文（上記）までなかった。本論は，この博士論文の第 2 部「少数民族形象」をもとに，その後の研究を加えて書き換え，整理したものである。
5) フーヘルはこの詩集の詩選択について，「時代がある役割をするのです」と書き，詩集『詩』の出版について,「この作品の公刊はもう数年待つべきであった」と述べている（1958 年 3 月 12 日づけ Ludvík Kundera あて手紙 : GW. II, S. 344）。このことばから，詩集『詩』の編集には当時のソ連占領地区の時代思潮（民族 / 民衆の自立）が影響を及ぼしたこと，そして，この時代思潮が過ぎ去った 1958 年の時点では，詩集『詩』に不満があることを読み取ることができる。1967 年に，詩集『詩』は詩集『星筌』（*Die Sternenreuse*）として改訂される。この改訂により，冒頭詩が「由来」（農業労働者としてのさまざまな民族 / 民衆が描かれている詩）から「アルト・ランガーヴィッシュでの子供時代」（*Kindheit in Alt-Langerwisch*: フーヘル自身の少年時代の思い出を題材にした詩）へと変更される。これによって，民族 / 民衆の自立の歴史の出発点が消えている。また，第 3 部では，詩「ハンス・A.・ヨアヒムの思い出に」（*In memoriam Hans A. Joachim*）が削除され，詩「退却」（*Der Rückzug*）は自然の再生ではなく, 荒廃の世界で終わっている（GW. I, S. 100-107, 166-170）。ただし最後の詩は,「帰郷」のままである。詩集『星筌』には，詩集『詩』にみられたような民族 / 民衆の自立というテーマもそれを支えるツィクルス構造もみられない。その代わりに，なつかしい少年時代と戦争によって荒廃した風景とが対比的に示されるようになっている。ただし，詩集『星筌』の編集にフーヘルの考えが全面的に反映しているわけではない。この詩集の改訂を担当した Piper 書店の原稿審査係長 Otto F. Best は，のちに（1982 年 9 月 9 日）Axel Vieregg にあてて,「詩集『星筌』の詩は私が選出しました。詩集表題もまた私の提案によるものです。私は当時の文学原稿審査係長として全体をフーヘルと東ベルリンで話しあい，彼の承諾を得ました」と書いている（GW. I, S. 412）。
6) フーヘルは wendisch（ヴェンデンの）という形容詞についてつぎのように説明している。「決して Lausitzer（ラウジッツの）ではありません。それくらいなら sorbisch（ゾルベンの）のほうがましです。しかし，この語はあまりに地域が限定されすぎています。ヴェンデン人は，本来，7 世紀からオーダー川，ハーフェル川，シュプレー川，エルベ川，ザーレ川とエールツ山地にはさまれた地域に住んでいたスラブ人を表す総称です」（1958 年 1 月 31 日づけ Ludvík Kundera あて手紙 : GW. II, S. 341）。フーヘルにとっては，古くからドイツ東部の広い範囲に住んでいたヴェンデン人を一地域の部族にすぎないゾルベン人で言い換えることには抵抗があったといえる。
7) Entzauberung は，一般的には,「ある人にかけられていた魔法からその人を解放すること（正常・正気にすること）」あるいは,「ある人がもっている魅力を奪うこと（興ざめさせること）」を意味する。Franz Grillparzer の詩集 *Gedichte*（1872 年）の詩 *Entzauberung* では，表題の Entzauberung は,「伝説の国」（V. 8）にいるかのように感じた錯覚から現実にもどることを意味する（*Deutsche Lyrik von Luther bis Rilke*, S. 37426）。Bruno Wille の詩集 *Der heilige Hain*（1908 年）の詩 *Entzauberung* では，表題の Entzauberung は，夕日によって美しく変貌した都市が，夜になって，現実の貧しい都市にもどることを意味する（*Deutsche Lyrik von Luther bis Rilke*, S. 110124-110126）。M. ウェーバー以降の社会科学では，Entzauberung は，呪術的世界から合理的世界への「脱呪術」あるいは「魔術･呪術からの解放」を意味する。フーヘルの詩では, Entzauberung は「魔術的に見えた力の実体を暴露してその力を消し去ること」を意味する。そのため「魔術消去」と訳す。フーヘルの詩集『第九時』では,「魔術消去」は重要なモティーフになっている。「魔術消去」は，一

方では，かつて有していた力を失ったフーヘル自身に自虐的に向けられ，他方では，キリスト教会に向けられている。

8) 詩に用いられている „Mittelgraben“（Str. 2, V. 8）は，フーヘルの故郷の村 Alt-Langerwisch に実在する水路の名称である。フーヘルが少年時代をすごした農家の北側は低地に向かってゆるやかに下っている。100m ほど下ると，東西に 3km 程度の長さの Mittelgraben がある。つぎの地図にも記載されている：Gebhardt, Lutz: Rad- Wander- & Gewässerkarte. Havelseen Werder-Potsdam. Ilmenau und Ostseebad Wustrow (grünes herz) 2005。詩の場所を自分が育った村に設定することによって，この詩に登場するジプシーとフーヘル自身とをさらに近づけている。

9) フーヘルは，1921 年（18 歳）ころ，詩「ジプシー」（*Zigeuner*: GW. I, S. 38）を書いている。この詩では，ジプシーの男たちは荒々しく，女たちは深夜の影のように不気味である。また，女たちの占いは燻製の煙に喩えられている。女たちは詐欺・いかさま（„gaunern“）をし，男たちは，夜陰に乗じて，柵囲いのある牧草地からウマたちをごっそり盗んで，朝露の降りるころにはジプシー一行は村をあとにしている。18 歳ころのフーヘルにとっては，ジプシーは，まだ自分を投影する形象とはなっていない。

10) アブラハム形象をフーヘルは，1932 年以前の初期の詩「アブラハム」（*Abraham*: GW. I, S. 11 f.）で用いている。この詩では，神（ヤハウェ）と人間（アブラハム）との関係が逆転させられ，宗教に対するフーヘルのパロディー的批判が表されている。

11) フーヘルは詩「アンモン人」を Axel Vieregg に送るさいに「私の定義」（1 ～ 5）をつけた（1974 年 1 月 3 日づけ手紙 : GW. I, S. 434）。その「定義」の第 5 は「死のにおい－アウシュヴィッツ－は創造の素晴らしさを無にする」として，詩中のことば「死のにおい」（V. 18）とアウシュヴィッツとをならべている。Vieregg は，詩「アンモン人」とアウシュヴィッツとを関連づけて，つぎの論文を書いている：Vieregg: *Ein Gedicht nach Auschwitz. Peter Huchels »Der Ammoniter«*。この論文で Vieregg は，詩中の「アンモン人」をドイツ人，「火」をアウシュヴィッツの死体焼却炉であると解釈している（S. 220 f.）。しかし，この詩とアウシュヴィッツ問題を結びつけることはできない。なぜなら，この詩のなかの「死」は，ナチスの時代にドイツ人がひきおこしたユダヤ人の死ではなく，異郷に生きるフーヘル自身に近づきつつある死であり，この自分の死が詩集『第九時』第 I 部および詩集『第九時』全体の中心テーマであるからである。

12) 詩集『街道 街道』第 V 部第 3 詩「ワルシャワの記念銘板」（*Warschauer Gedenktafel*: GW. I, S. 153）は，ワルシャワ蜂起（1944 年 8 月 1 日－ 10 月 2 日）を題材にしている。ワルシャワ蜂起にはユダヤ人は加わっていない。これより 1 年以上前のワルシャワ・ゲットー蜂起（1943 年 4 月 19 日－ 5 月中ごろ）のあと，ユダヤ人はワルシャワから追放されていたからである（Benz et al., S. 795 f.）。

引用文献

Benz, Wolfgang, u. Hermann Graml, u. Hermann Weiß (Hrsg.): Enzyklopädie des Nationalsozialismus. 3. Aufl. München (dtv) 1998.

Holl, Kurt, u. Sefedin Jonuz: Die Minderheiten der Roma (und Sinti). In: Cornelia Schmalz-Jacobsen, Georg Hansen (Hrsg.): Ethnische Minderheiten in der Bundesrepublik

Deutschland. München (Beck) 1995, S. 420-433.
Huchel, Peter: Gesammelte Werke. 2 Bde. Hrsg. von Axel Vieregg. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1984.［GW と略記］
Deutsche Lyrik von Luther bis Rilke. Digitale Bibliothek Bd. 75. Berlin (Directmedia) 2003.
[Die] Luther-Bibel. Originalausgabe 1545 und revidierte Fassung 1912. Digitale Bibliothek Bd. 29. Berlin (Directmedia) 2000.
Müller, Joachim: Verwandelte Welt. Zur Lyrik Peter Huchels. In: Axel Vieregg (Hrsg.): Peter Huchel. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1986, S. 166-174.
Nijssen, Hub: Der heimliche König. Leben und Werk von Peter Huchel. Nijmegen (Universiteitdrukkerij Nijmegen) 1995.
Rao-Casimir, Aparna: Die Minderheiten der Sinti (und Roma). In: Cornelia Schmalz-Jacobsen, Georg Hansen (Hrsg.): Ethnische Minderheiten in der Bundesrepublik Deutschland. München (Beck) 1995, S. 442-453.
Vieregg, Axel: Ein Gedicht nach Auschwitz. Peter Huchels »Der Ammoniter«. In: Axel Vieregg (Hrsg.): Peter Huchel. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1986, S.216-229.
Walther, Peter (Hrsg.): Peter Huchel. Leben und Werk in Texten und Bildern. Frankfurt am Main/ Leipzig (Insel) 1996.
クレム , フォルカー（大藪輝夫 / 村田武訳）:『ドイツ農業史』. 大月書店 1980.
杉浦謙介 :「ペーター・フーヘル」. In: 神品芳夫（編著）:『自然詩の系譜』. みすず書房 2004, S. 196-239.

Zu den Figuren der ethnischen Minderheiten von Wenden, Zigeunern und Juden in den Gedichtbänden Peter Huchels

Kensuke SUGIURA

Peter Huchel (1903-1981) hat vier Gedichtbände veröffentlicht: *Gedichte* (1948), *Chausseen Chausseen* (1963), *Gezählte Tage* (1972) und *Die neunte Stunde* (1979). Sie zeigen zyklische Strukturen und halten Figuren der ethnischen Minderheiten von Wenden, Zigeunern und Juden fest. In dieser Abhandlung werden die folgenden Fragen gestellt:

- Was für Rollen spielen die Figuren der ethnischen Minderheiten in den zyklischen Strukturen?
- Was bedeuten die Figuren der ethnischen Minderheiten für Huchel?
- Wie spiegeln sich die Massaker und die sozialistische Politik zur Selbständigkeit der Völker im 20. Jh. in den Figuren der ethnischen Minderheiten wider?

Die wendischen Figuren im zweiten Gedicht *Wendische Heide* und im letzten Gedicht *Heimkehr* spielen im Rahmen des Gedichtbandes *Gedichte*, der die Geschichte zur Selbständigkeit der Völker in zyklischer Struktur entwickelt, die Hauptrolle. Als sich nach der Gründung der DDR im Jahr 1949 die Politik zur Selbständigkeit der Völker als eine zum Sozialismus entlarvte, haben die wendischen Figuren bei Huchel an Wichtigkeit verloren und im Gedicht *Chronik des Dorfes Wendisch-Luch* (1951) wurde die Armut des Volks in der DDR gezeigt. Nach der Emigration aus der DDR im Jahr 1971 stellte Huchel im Gedicht *Ölbaum und Weide* ein illusionäres Bild der „wendischen Weidenmütter“ dar, das gemischt aus wendischen Frauen und Weiden besteht. Im Wandel der wendischen Figuren bei Huchel kann man die Entwicklungen der Politik in der Sowjetischen Besatzungszone und die Verwandlungen des Lebens von Huchel sehen. Ein Einfluss von den Massakern ist in den wendischen Figuren nicht erkennbar.

Die zigeunerischen Figuren beziehen sich in allen Gedichtbänden Huchels eng auf die Themen, die sich in der zyklischen Struktur entwickeln. Im Gedichtband *Gedichte* steht die zigeunerische Figur im ersten Gedicht *Herkunft*, d.h. am Anfang der Geschichte zur Selbständigkeit der Völker. Im Gedichtband *Chausseen Chaus-*

seen beziehen sich die zigeunerischen Figuren in den Gedichten *Das Zeichen*, *Schlucht bei Baltschik* und *Caputher Heuweg* auf das Thema des Gedichtbandes: Zeichen und Sprache in der Geschichte zum Kalten Krieg. Im Gedichtband *Gezählte Tage* stellt die zigeunerische Figur im Gedicht „Die Gaukler sind fort ...“ (ohne Titel) das Thema des Gedichtbandes dar: Hausarrest und Emigration oder Zeichen und Sprache im diktatorischen Staat. Im Gedichtband *Die neunte Stunde* beziehen sich die zigeunerischen Figuren in den Gedichten *Östlicher Fluß*, *Unterwegs* und *Entzauberung* auf das Thema des Gedichtbandes: Leben und Sterben im Exil oder Zeichen und Sprache in der Fremde, und auf das Motiv der Entzauberung. Im zweiten bis zum vierten Gedichtband deuten die zigeunerischen Figuren den Dichter Huchel selbst an. Die Politik zur Selbständigkeit der Völker spiegelt sich in der zigeunerischen Figur im Gedichtband *Gedichte* wider. Aber sie spielt eine viel kleinere Rolle als die wendischen. Die Massaker an den Zigeunern sind in zwei zigeunerischen Figuren nur angedeutet.

In der Literatur und den bildenden Künsten werden Juden nicht nur als Menschen der Welt, sondern auch als Figuren aus dem Alten Testament dargestellt. Die jüdischen Figuren Huchels zeigen sich in seinen Gedichten öfter in den Figuren aus dem Alten Testament als in den Menschen der Welt. Im Gedichtband *Gezählte Tage* stellen die jüdischen Figuren aus dem Alten Testament von Ephraim, Gefangenen in Babylonien und Hiob in den Gedichten *Ankunft*, „November ...“ (ohne Titel) und „Gehölz ...“ (ohne Titel) in engen Beziehung zur zyklischen Struktur das Thema dar: Hausarrest und Emigration oder Zeichen und Sprache im diktatorischen Staat. Die Figur Abraham im Gedicht *Am Jordan* in demselben Gedichtband bildet die poetische Landschaft Huchels ab. Im Gedichtband *Die neunte Stunde* stellen die jüdischen Figuren aus dem Alten Testament von einem Ammoniter und von Babel in den Gedichten *Der Ammoniter* und *Begegnung* in enger Beziehung zur zyklischen Struktur das Thema dar: Leben und Sterben im Exil oder Zeichen und Sprache in der Fremde. Die jüdischen Figuren in der Welt zeigen sich im Gedicht *In memoriam Hans A. Joachim* im Gedichtband *Gedichte* und im Gedicht *Nachlässe* im Gedichtband *Gezählte Tage*. Der Jude Hans A. Joachim wurde in Auschwitz ermordet. Aber im Gedicht ist keinen Einfluss von den Massakern der Juden ersichtlich. Das Gedicht *Nachlässe* hat als Stoff den Aufstand im Warschauer Getto im Jahr 1943. Aber es behandelt das Thema des Gedichtbandes: Zeichen und Sprache im diktatorischen Staat und drängt das Bild von den Massakern in den Hintergrund. Die Politik zur Selbständigkeit der Völker spiegelt sich nicht in den jüdischen Figuren wider.

Die Figuren der ethnischen Minderheiten von Wenden, Zigeunern und Juden spielen in den Gedichtbänden Huchels verschiedene Rollen. Aber diese Figuren

beziehen sich eng auf die Struktur des Gedichtbandes, wenn sie darin auftreten.